

ショートフィルム “Seeking OTSUKA”

製作プロジェクト概要

木村めぐみ・村松里実・仲田桂祐・渡辺悠平・Robert Thomson

1. はじめに

本稿は、ショートフィルム “Seeking OTSUKA” 製作¹ プロジェクトの概要である。このプロジェクトは、名古屋大学大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコースの学生が中心となってショートフィルムを制作、その第一回上映を2009年から続く円頓寺映画祭（後述）での公開に設定し、その後学生たちがこれまでに得た知識を活用してコンテンツ展開を目指すものである。

ショートフィルムは、映像制作に興味のある学生が中心となって計画を進め、2010年5月より企画をはじめ、撮影準備（プリ・プロダクション）に約3カ月を費やして8月末から9月はじめにかけて撮影を行った。その後、ポストプロダクション（編集など）、専用ホームページの作成（<http://empowermentfilms.jp>）、撮影地となった円頓寺商店街及び円頓寺本町商店街のロケ地マップ作成を経て、円頓寺映画祭を迎えた。

2010年11月12、13日に行われた当映画祭で、ショートフィルム “Seeking OTSUKA” は合計4回上映された。また、同月27日に埼玉県鷲宮町で行われたコンテンツ・ツーリズム研究会²でも上映され、現在、国内外映画祭に積極的に出品、今後のコンテンツ展開を模索している段階である。

本稿ではまず、このプロジェクト実施の意図と目的、ショートフィルムの制作体制と制作過程を紹介する。また、本文末にはそのあらすじと脚本、劇中のシーン、撮影風景の写真を掲載する。

2. 学生映画プロダクションとしての Empowerment Films

“Seeking OTSUKA” は、架空のプロダクション Empowerment Films によって製作された。これは、木村（を中心としたメンバー）がショートフィルムの制作、その展開で生じうる一切の責任を負うためである。

Empowerment Films と名付けたのは、このエンパワーメントという概念が、映画製作における重要な概念と位置付けられるためである。“Empowerment” という英単語は字義的な意味では、「パワー（Power）」という言葉の前に、「～する」「～した状態」を意味する em- という接頭語があることから、「力をつけること」「力をつけた状態」と解釈することができる。尚、オックスフォード大事典で empower は①「力や権力をもって正式に、あるいは合法的に権利・許可を与える」②「ある目的を可能にする

ため、許可するために力を与える、授ける」、empowerment は、「エンパワーするための行動、エンパワーされている状態」と説明されている。

この言葉は、1970 年代に黒人の社会福祉に関する研究 (Solomon 1977) のなかで用いられて以来、「社会的弱者」や「マイノリティ」といった人々を対象に浸透していった。我が国でも「1990 年代に入ってから」(小田 5)、たとえば福祉、看護、医療、経営、教育、開発援助など様々な領域で使用されている。尚、映画製作との関連では立岡 (2006) が、英国映画産業の一特徴としてこの言葉を利用している。

すなわち、「人間」一人一人が、その対人関係、あるいは自身のうちに抱える問題を解決するためのキーワードが、このエンパワーメントという概念である。また、その前提には個々人が自己のうちに、自ら、あるいは所属する組織や社会が抱える問題を解決しうる潜在的な力をもっている、ということがあげられる。

さて、本プロジェクトで架空のプロダクションを立ち上げたのは、今後、学生が主体となった学内組織として、様々な映像コンテンツを生み出す中心的な組織として発展させることをも願うためである。図 1 は、Empowerment Films のロゴマークであり、今後製作されうるコンテンツなどのシンボルとしても利用される。



図 1 Empowerment Films のロゴマーク

Empowerment Films の最終的な目的は、我が国において英国の「地域の映画組織」のような組織を実現するためである。地域の映画組織とは、イングランド内 9 拠点の Regional Screen Agency (RSA)、そしてスコットランド、ウェールズ、北アイルランドにそれぞれの National Screen Agency (NSA) であり (木村 2009)、「地域と映画製作者の間」で「先導をとり、専門知識を与え、つながりを生み出し、開発を推奨する」(Holden 16-17) 組織である。

この組織の主な展開は、「オーディエンス・ディベロップメント」、「地域のプロモーション」、「文化保存」に集約可能であり、オーディエンス・ディベロップメントには教育 (若年層に対する映画製作の機会の提供やメディアリテラシー教育など)、トレーニング (製作者を目指す人々への機会提供、インターンシップなど)、上映イベント (過去に上映された映画のリバイバル上映や、教育的要素の強い映画祭など) などが含まれる。また、地域のプロモーションは映画の撮影誘致、撮影現場での補助、地域で撮影された映画の撮影地マップ作成などの観光客誘致に関する取組みなどである。そして、文化保存には、表象によって地域の歴史や景観を記録すること、いわゆるマイノリティの人々専門の映画祭の開催、歴史ある映画館の保存やアーカイブなどが含まれる (木村 2009、51-53)。

今回のプロジェクトで制作したショートフィルムは、「地域のプロモーション」を最重要課題として位置付けた。本作品を契機にその主たる撮影地となった円頓寺商店街・

円頓寺本町商店街（あるいは今後関与する地域など）で、オーディエンス・ディベロップメントや文化保存などの活動へと発展させていくことが Empowerment Films の狙いである。尚、その第二作目として、円頓寺商店街が舞台となった 2011 年公開の映画『WAYA! 〜宇宙一のおせっかい大作戦』の劇中ドラマ（スピンオフ作品として展開予定）を制作した。このように地域で製作される映画との協働も Empowerment Films は目指している。

さて、本プロジェクトがエンパワーメントの主な対象として位置づけたのは、まず第一に学生（名古屋大学大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコースの学生）、第二に撮影地となった円頓寺商店街・円頓寺本町商店街である。本章では以降、学生と商店街がどのような問題、課題を抱えているか、そしてその解決の方法としてのショートフィルム制作の意義について考えていく。

2.1 学生とエンパワーメント

メディアプロフェッショナルコースに所属する学生の多くは、修士課程修了後に就職を希望、在学一年目の終わりには就職活動をはじめている。日本国内での就職事情がますます厳しくなっているなか、多くの学生が就職活動を在学期間中の最重要課題の一つとして位置づけているように思われる。

就職活動中、エントリーシートや面接を通して学生が問われることは、主に「学生時代にもっとも力を入れたこと」である。修士課程の学生の場合、研究も半ばで就職活動を始めざるをえず、これまで木村が目にしたエントリーシートでは、多くの学生（とりわけ留学生）が「学生時代にもっとも力をいれたこと」にアルバイトでの経験を記入していた。二番目に多かったのが、シンポジウムであった。これまでのシンポジウムでは、ジャーナリズム系の学生を中心に、おおよそ全ての学生がそれぞれの得意分野を生かして個々人の役割を担ってきた。

シンポジウムの運営が、もはやメディアコースの学生の活動として確立しつつあるなか、コンテンツ制作に興味のある学生を中心とした取り組みとして企画したのが、本プロジェクトである。メディアコースの学生には、映像制作を志して入学したものも少なくない。修了制度としてのコンテンツ制作は、メディアコースの特記すべき特徴であるが、そうした制作活動は、個々人によるものでもあった。

本プロジェクトでは、コンテンツ制作で修了を予定する修士一年目の学生を中心に声をかけ、それぞれが、それぞれの得意分野を最大限に生かすことのできる役割を担った。この経験が彼らの今後にとって有意義なものとなることを願ってのことである。

2.2 円頓寺商店街・円頓寺本町商店街

明治 20 年代以降、「笹島までの鉄道駅開設（1886）、その近くに豊田自動織機工場・

日本陶器工場が建設され、市電江川線の開通、瀬戸～堀川間の名鉄瀬戸線（通称・瀬戸電）の開通により、円頓寺筋に商店街が形成され、名古屋西部一帯の中心的盛り場になっていった。それが、円頓寺商店街、および円頓寺本町商店街である。

当商店街は、飲食・用品、雑貨を中心とする商店街に発展し、劇場や寄席もできたことで「大正・昭和の戦前を通じて堀川以西の最大の盛り場」になった。昭和20年代から昭和30年代にかけて「労働者の憩いの町」として繁盛したものの、「経済の復興と共に、交通の要衝としての名駅に商業の中心ができ」、「デパートと地下商店街の構成で、従来の客の流れが一変」したこと、そして「人口のドーナツ化減少でこの地域の人口が半減したこと」で、昭和28年から平成17年の間に円頓寺商店街の店舗は89店舗から37店舗へ、本町商店街は105から56店舗と大幅に減少し、盛時の勢いを取り戻すに至っていないという（川原 84-91）

かつて、円頓寺には幾つかの映画館が存在した。しかし、今やその「映画館」はすべて廃業し、商店街に映画館は一つもない。ただし、この商店街の映画との関係は浅くない。2009年にはメディアコースの（当時）修士一年目の学生が中心となり、円頓寺映画祭を立ち上げた。2010年には第二回目の映画祭が開催されたが、この取り組みの持続を期待する商店街の方々の声も聞かれた。

それ以前から商店街の有志らは商店街を舞台とした独自の映画の製作を試みてきた。2008年以降のことである。その企画は、ようやく2010年になって動き出し、現在2011年の公開を目指して一本の映画が制作されている。

つまり円頓寺商店街は、映画文化の根付いた町、あるいはそうなる可能性をもつ地域と考えられる。ショートフィルム“*Seeking OTSUKA*”は、この円頓寺商店街を舞台に、また商店街の店主、店員の方々にも出演を願い、学生と地域の方々との「協働」により制作された。今後もこの関係の維持、発展が期待されるところである。

3. 製作体制

本章では、ショートフィルム“*Seeking OTSUKA*”の製作体制について紹介する。本作品は、学生、プロフェッショナル、地域住民との協働での映画制作を志したが、そのスタッフは主にメディアコースの学生であった。

監督と編集を担当したのは、修士一年の村松である。名古屋市立大学芸術工学部在籍時より映像制作の経験を有し、本作品の監督としてもっとも経験ある最適な学生と考えられたためである。また、村松の学部時代の後輩である古田俊氏（名古屋市立大学芸術工学部4年生）が録音を担当した。そして映画の美術担当、撮影時には村松の撮影補助を担ったのが、修士一年の渡辺である。

さらに、映画の大部分を占めるナレーション部分を録音する際、後藤明史先生に多大なるご協力をいただいた。また今後、国際言語文化研究科の国際性を生かし、留学

生らとの協働で中国語、韓国語、ヒンドゥ語、マレー語、フランス語の字幕版を制作する予定である。

主演は、主人公ロバートを演じた Thomson、物語のキーパーソンともなったオーツカを演じた仲田である。現在、研究生の Thomson は来日前にスケートボードで世界を半周したギネス記録をもつ。その旅の映像を細かく記録していたことから、その一部を本編でも使用した。また、仲田はメディアプロフェッショナルコース入学前に数々のオーディションを受け、俳優を志した経験ももっている。

その他、劇中の授業シーンで池側隆之先生ほか何思穎さん（当時博士前期課程一年）、陳悦さん（当時博士前期課程二年）、謝小建君（当時博士後期課程一年）が出演してくれた。尚、この授業のシーンは、金相美先生の授業の再現であり、当日は都合上撮影に参加いただけなかったが、本作品の着想には、前期に金先生が開講した「社会情報学概論」の日本人論に関する授業が役立った。以上が本プロジェクトにおけるメディアプロフェッショナルコースの主な関係者である。

本プロジェクトでは、映画製作の現場に携わるプロフェッショナルの方々にもご協力をいただいた。助監督として河瀬直美監督の『殯（もがり）の森』（2007）など多数の作品にかかわってきた渡辺直樹氏は、奈良および東京を拠点として活動している。2010年8月17日に氏は名古屋に来てくださり、村松と木村と共に円頓寺商店街においてロケーション・ハンティングを行い、制作に対するアドバイスもいただいた。

また、横浜国立大学経済学部教授のアレック・マッコーレー（Alec McCaulay）氏は、経済産業省関連の映画プロジェクト J-Pitch に関与し、また現在英国ボーンマス大学（The Media School at Bournemouth University）で博士号取得を目指している。その専門は脚本であり、特に自身の専門であるという「ナレーションの効用」についてアドバイスをいただいた。

さらに Empowerment Films のロゴマークの制作など、本作品のデザイン関連の業務を請け負ってくれたのが、長年、英国を活動拠点としてきたグラフィックデザイナーの高橋慶成氏である。

そしてこの作品のなかで、最も重要な役割を果たしてくださったのが、円頓寺商店街、及び円頓寺本町商店街の皆さんである。オーツカの母親として、円頓寺商店街組合の理事長である高木麻里さんが出演してくださったのを筆頭に、劇中で10店舗10名の方々にご出演いただいた。また、そのほか4店舗で撮影協力をいただくことができた。このように、円頓寺商店街ならびに円頓寺本町商店街の方々の多大なるご協力のもとに、“Seeking OTSUKA”は製作された。

この他、劇中で使用する小道具として、3つの機種（S001 グリーン、SH005 ピンク、LIGHT POOL ホワイト）の携帯電話を株式会社 KDDI に貸与していただいた。また、ウェ이터役として出演してくれた大河内恭介氏の協力のもと、栄三丁目に7月に開

店したカフェ・レストラン WALTZ でも撮影が行われた。店内にはスケートボードの中心地ともいえる 100m 道路下のアート作品などが飾られており、スケートボーダーの集まるカフェとしても知られている。

4. 製作過程と今後の課題

本章では“*Seeking OTSUKA*”の製作過程を紹介する。本作品の企画は 2010 年 5 月に開始した。そのときは異なる企画として立ち上がっていたが、資金難などの問題から、大幅な変更をおこなった。このときに考案した基本構想が以下の三点であった。

- ・日本語と英語（多言語の字幕）によるショートフィルム（15 分程度）
- ・留学生を主演とし、日本人学生との交友を描く
- ・古きよき日本の象徴としての商店街を舞台とする。

そうして、主演を依頼したのが、Thomson と仲田であり、快く出演を引き受けてくれた。まず、7 月 28 日には、村松、渡辺、木村とでロバートのインタビューを行い（映像を撮影）、それをもとにして、木村が脚本を執筆した。このとき参考にしたのは、BFI Education が発行する *Teaching Film and Media Studies* シリーズの“*teaching Script Writing, Screen Plays and Storyboards for Film and TV production*”のテキストなどである。

撮影準備は主に村松と木村で行った。まず、8 月 29 日に撮影地となった円頓寺商店街およびカフェ・レストラン WALTZ へ足を運び、挨拶を行った。撮影許可、協力を得るためである。商店街では当日、にっぽんど真ん中祭りが開催されており、大変にぎやかであった。営業していない店舗もいくつかあったが、合計 30 店舗で映画に関する説明、そして映画出演への協力要請を行った。30 店舗のうち、撮影を快諾してくださった店舗は 24 店舗、そのうち出演を了承してくださった店舗は 10 店舗、休業日などの都合で 5 店舗は撮影を断念した。

撮影は 8 月 30 日から 9 月 1 日までの 3 日間を使って行われた（表 1 参照）。使用した機材は、Sony 社のハンディカム、録音機材は ZOOM 社の HANDY RECORDER H4 である。これは、いわゆるプロフェッショナルが使用する機材ではなく、容易に手に入れられるものである。

撮影終了後、ポスト・プロダクションは村松が担当し、Final Cut を利用して編集を行った。また、木村は当映画のホームページ（<http://empowermentfilms.jp>）、円頓寺商店街・本町商店街と Waltz の位置情報を掲載したロケ地マップを制作した。

今後の課題は、このショートフィルムを全国的に上映していくことだが、まず 2010 年の円頓寺映画祭のオフィシャル・ムービーとして上映された。映画祭に先駆け、10

月 16 日の名古屋大学ホームカミングデー、10 月 20-23 日の円頓寺でおこなわれたイベントで PR 活動を行い、予告編とあわせて、本映画と映画祭の同時宣伝を積極的に行う。また、11 月 27 日のコンテンツ・ツーリズムフォーラム（埼玉県鶯宮町）でも地域のコンテンツとして上映され、その他国内外の映画祭への出品を精力的に行っている。

表 1 撮影スケジュール

8 月 30 日 天候：晴れ	
1 時	BAR DUFI（スペイン料理屋）にてオープニングシーンの撮影
2 時	インタビュー映像の撮影 (肉の丸小、美光（眼鏡店）、BAR DUFI、松川屋（日本雑貨）、サキアテジョーグー（沖縄料理）)
15 時半	マツバコーヒー（喫茶店）にて円頓寺商店街理事長の高木麻里さんの出演シーンを撮影
16 時	ブティック MANO、サイクリングショップ JUN でインタビュー映像の撮影
18 時	栄に移動、カフェ・レストラン WALTZ にて撮影
8 月 31 日 天候：晴れ	
1 時	名古屋大学全学教育棟新北棟 211 教室にて授業シーンの撮影
2 時	大学構内の道路などでの撮影
3 時	アフレコ
5 時	屋上シーンの撮影
9 月 1 日 天候：晴れ	
3 時	Como house（カフェ）にてエンディング・シーンの撮影
4 時	インテリアショップマルカにてインタビュー映像の撮影
5 時	円頓寺商店街風景、スケートボードシーンの撮影

5. おわりに

本稿では、“Seeking OTSUKA”の製作目的とその体制について紹介した。このプロジェクトは、学生の主体的な活動として、また円頓寺商店街に対してどのような役割を果たしただろうか。このことを明らかにすることが今後の課題であり、今回の製作プロジェクトでの反省点を生かして今後も学生を主体とした映像製作を続けていきたい。また、本ショートフィルムを用いて様々な実証実験を行い、日本国内で今後ますます盛んになるであろう「地域での映画製作」の活発化に貢献できることを願っている。

資料①あらすじ

ニュージーランド生まれのロバートは、スケートボードで世界を旅し、ギネス記録をもっている。そんな彼が旅のあとに目指したのは日本。かつて彼の通うウェリントンの小学校に転校してきたオーツカを探すためだった。ロバートはこれまでに3度、日本に住んだことがある。そのときには、いつもオーツカと会っていた。最後に会ったのは世界旅行の前。国境や言語を越えた友情で結ばれていたはずのロバートとオーツカ。しかし、ロバートのたびの途中、突然、オーツカは姿を消した。インターネットを通じて連絡を取り合っていた二人だが、ある日を境にロバートはオーツカとコンタクトがとれなくなった。オーツカの身に一体なにがあったのか。ロバートは、オーツカの住む町、名古屋でオーツカを探し、そして待ち続けるのだった。

資料②脚本

EXT. Café- Endouji (Shopping Arcade). Day.

The shopping arcade is empty and quiet. ROBERT is using his computer in front of the café.

>> TITLE “Seeking OTSUKA”

ROBERT

This is my story. It's my story in Japan, looking for my old friend, OTSUKA.

ROBERT checks his mobile phone and then quickly returns it to his bag.

ROBERT

Otsuka and I have been friends for more than ten years since 1991, when Otsuka transferred to my school in Christchurch, New Zealand.

ROBERT is using his computer and smiles, often looking around the shopping arcade. He produces a bunch of letters from his bag.

ROBERT

OTSUKA went back to Japan though just in a year, but you know, we became best friends getting over our languages, different nationalities, and so much more.

EXT. PC Screen

ROBERT clicks “KEN OTSUKA,” on the SNS page.

ROBERT (OV)

But our communication stopped suddenly 2 years ago. I did send him some e-mails but he never got back to me.

EXT. Road. Day

ROBERT is riding his skateboard, skating through Nagoya University.

ROBERT

I have lived in Japan for Four times.

I was a high school exchange student the first time and that was in Kyusyu, the southern part of Japan, and came back to Japan 3years later as a college student. Then I worked for a private university in Hokkaido, in the northern part of Japan. I worked to help international students from all over the world.

INT. WALTZ (Restaurant). Night.

ROBERT and OTSUKA are sitting beside the window chatting with each other.

オーツカ

いつも、名古屋にきてもらって悪いね。

ロバート

いいさ、旅行するのが好きだから

A waiter bring them “Curry bread “ and “Shirasu-Avocado Don” .

WAITER

おまたせしましたー。「カレーパン」とシラスアボガド丼です。

オーツカ

仕事どう？

ロバート

やめたよ

オーツカ

え？やめた？ニュージーランドかえるの？

ロバート

いいや、旅をしようかと思って。

オーツカ

旅？どこに？

ロバート

世界中

オーツカ

世界中？

ロバート

そう、世界中をこのスケートボードで

オーツカ

相変わらず、ロバートは自由だなー

EXT. Pathway in front of Central Library, Nagoya University. Day.

ROBERT is skating along the path on his skateboard.

ROBERT (OV)

I decided to study at Graduate school here in Japan.

INT. 211classroom. Day.

An audience (students of the Media Professional Course) is listening to ROBERT's presentation

ROBERT finished his presentation. Using his PC. His PC screen.

ROBERT (OV)

But I had another purpose while in Japan. Yes, OTSUKA. I hadn't heard from him for two years and I really want to meet up with him.

The only clue that I had to find him though was one Japanese Kanji, which can be pronounced "Hen." This Kanji and 3 exclamation marks was the last message from OTSUKA that I got from him two years before.

This Kanji has many means in English like strange, odd, funny, revolution, and change.

>>EPISODE1- Revolution

EXT. Rooftop of the Main Building for Inter-Departmental Education, Nagoya University

Some colorful chairs are placed here and there, and ROBERT is sitting on one of them. OTSUKA is leaning against rooftop railing.

ROBERT (OV)

OTSUKA's dream was to be a revolutionist when he was in New Zealand. Maybe it was because our teacher was always talking about the historic revolutionists.

OTSUKA is talking on his mobile, and ROBERT is looking at him with concern.

ROBERT (OV)

But it seemed that the grown up OTSUKA seemed to be forgotten his magnificent dream. I remember that OTSUKA was very tired with his job hunting. The call on that day was the announcement to let him know his failure to get the job at the TV station. And he really wanted that job.

OTSUKA (オーツカ)

ROBERT の夢ってなに？

ROBERT(ロバート)

夢？

OTSUKA (オーツカ)

そう、旅した後の夢

ROBERT (ロバート)

わからない

OTSUKA (オーツカ)

昔、映画監督になりたいっていっていなかった？

ROBERT (ロバート)

よく覚えてるね。僕も覚えてるよ、オーツカの夢

OTSUKA (オーツカ)

恥ずかしいから言わないで

ROBERT (ロバート)

恥ずかしい？

OTSUKA (オーツカ)

夢はかなわないから夢なんだ

ROBERT (ロバート)

オーツカの夢、恥ずかしいことなんてないさ

OTSUKA (オーツカ)

いいよな、ロバートには目標があって

ROBERT (OV)

To travel around the world with my skateboard was one of my dreams but I was going to make the dream reality. OTSUKA reminded me strengthen that the dream is just a dream. He said that the dream should be an aim.

>>Episode2 - Strange

EXT.*Robert's travel movies.

EXT. PC Screen. Night.

ROBERT clicks on "KEN OTSUKA," on the SNS page.

ROBERT (OV)

It was a year and a half ago, when I noticed that OTSUKA seemed to be strange. After I began my trip from Pusan, I kept up status of OTSUKA on my PC. His dairy was always poetic and it was kind of hard work to understand his circumstances, but I could imagine that he was in a difficult time with his job hunting, and his girlfriend.

>>EPISODE3-ODD

EXT. PC Screen. OTSUKA's SNS page.

ROBERT (OV)

His diary entries and comments became more and more odd, after he finished his job hunting.

*ROBERT's movie "isolation" in China

>>Episode 4 Crazy

EXT. Endouji shopping arcade. Day.

ROBERT is on his skateboard with his camera. He is standing in front of a

butcher's store.

ROBERT (OV)

When I went back to Japan for the first time in three years, I tried to seek OTSUKA in his hometown. Residents and shop owners were very kind to me, and it was a nice experience that I could talk with them.

*the interview movie (with people at Endouji shops)

ROBERT (OV)

Why did they say that OTSUKA was a crazy guy? I didn't feel that OTSUKA was Crazy, but almost all the people in the town told me not to meet him.

>>EPISODE5 Change

EXT. ENDOUJI shopping arcade. DAY.

Robert is walking with his skateboard in his hands. He stops in front of a shoe shop. OTSUKA's mother come out.

ROBERT (OV)

What happened to OTSUKA? Did he become a man who I don't know? What made him so crazy? I could not believe it. No, I didn't want to believe that OTSUKA had changed so much.

INT. ENDOUJI, café

ROBERT is talking with OTSUKA's mother, both drinking coffee.

ROBERT (OV)

I met OTSUKA'S mum and asked about him. But, she didn't tell me anything about her son.

>>EPILOGUE

Int. Comohouse- Endouji (Shopping Arcade). Day.

ROBERT is using his computer in front of the café.

ROBERT (OV)

Now, I am here waiting for OTSUKA. This story is about to be concluded. I wrote a letter to OTSUKA, not an e-mail or SNS message. I thought that my letter convey my feelings to him better than electronic ones. It was like a love letter. haha

well...I have to go back to my home country tomorrow after my 2 years here as a graduate student in this town. I really want to meet OTSUKA. Is this story going to end without the appearance of him? Will I never meet OTSUKA again?

What is the end of this story? May be you think that OTSUKA became Hikikomori or something and changed a lot, or dead or ill.

That's not the end of the story. I don't like that kind of that ending.

ROBERT's friend Yuhei approaches ROBERT, and gives him a letter.

*Flash backs of OTSUKA.

ROBERT (OV)

OTSUKA knows everything. He knows everything about me. He knows that I am making a story with this camera.

He knows everything because he has a PC and accessed my pages by a different account which I don't know. He read my blogs and social network updates every day.

This story was set by him.

*Flash back of People in ENDOUJI

ROBERT (OV)

The people in this town, including OTSUKA's mom was simply acting. They were asked to say bad thing about him to me.

Robert stands up, taking his skateboard, and skates through the arcade.

ROBERT

In his letter, he said that he will meet me at the airport tommorow and go to New Zealand with me. He quitted his job and decided to live in New Zealand for a year. That is his dream.

(Written by Megumi Kimura, Robert Thomson and Alec McCaulay)

資料③ホームページ（トップページ）



資料④ロケ地マップ



資料⑤撮影風景写真



<注>

- 1 本稿では、映画の Production、すなわち、企画立案から公開までの全過程を「製作」、Making、すなわち映画の撮影など作品をつくりあげる作業を「制作」と差別化をはかっている。
- 2 アニメ「らき☆すた」の聖地と呼ばれる埼玉県鷺宮町（現久喜市）で開催された。「研究者だけでなく、地域住民、コンテンツ製作者などを含め、新たな地域振興やビジネスモデルの構築を検証する」場として、第一部で研究発表会、第二部で「地域発映画」の上映会が行われた。尚、この上映会で上映された映画『鷺宮☆物語』（2010）は、円頓寺映画祭でも上映された。

参考文献

- 小田兼三・杉本敏夫・久田則夫編『エンパワメント：実践の理論と技法』中央法規、1999.
- 川原茂樹「ものづくり文化の道の形成：ものづくりの歴史的背景」『名古屋市区ものづくり文化の道ガイドブック』76—94、ものづくり文化の道推進協議会編著、2006.
- 木村めぐみ「イギリス映画産業の地域・オーディエンスとの連携—フィルムコミッションの展開と可能性」、『情報文化学会誌』、第16巻1号、2009.
- 黒沢 清『映画の授業—映画美学校の教室から』、青土社、2004.
- 山崎茂雄、立岡浩編『映像コンテンツ産業の政策と経営：行政・NPO・企業の協働型創造システム』中央経済社（2006）
- Holden, John “The Big Picture The Regional Screen Agencies building: community, identity and enterprise,” DEMOS, London, 2006.
- Readman, Mark “Teaching Script Writing, Screen Plays and Storyboards for Film and TV production” Teaching Film and Media Studies, BFI (British Film Institute) Education, 2008.
- Solomon, Barbara “Social Work in Oppressed Communities,” Columbia Univ Press, 1977.